

2019年1月27日礼拝説教要約  
シリーズ・ダビデの生涯に学ぶ⑩

## ダビデとバテ・シエバ

(サムエル11:1-27)

### 一、欲がはらんで罪を生み

ダビデはイスラエルの王となるべく選ばれた器でした。主なる神が王であり、地上における神の代理者として王が立てられるという、当時の古代オリエントにあつては特異な形の王国がダビデ王によって確立されようとしていました。その頃の物語です。1節をご覧ください。〈サムエル11:1〉 作戦の指揮を執っていたのは將軍ヨアブでした。ヨアブはダビデにとつて目の上のたんこぶのような存在でした。そういうヨアブも、今はダビデを王として尊敬する有能な將軍として指揮を執っていました。一方のダビデは、王宮にいて戦いを見守っていました。ちょうどそのときのことです。2節です。〈11:2〉 一人の女性がからだをあらつて

上げていないことは詮索しないのが賢明かと思われず。いずれにしても、ダビデ王は不意を突かれたかたちで誘惑され、ずるずると主の御心を損なう方向に引きずられて行つてしまいました。

### 二、罪が熟して死を生み

創世記に、「罪は戸口で待ち伏せて、あなたを恋い慕つている。だが、あなたは、それを治めるべきである(創世記4:7c)」という聖句がありますが、ダビデの置かれた状況がこれに当てはまります。ダビデは、誘惑を退けません。3節です。〈11:3〉 とくろで、この文章も考えさせられるところで、ダビデ王はほんとうに知らなかつたのか。知つていたのに、王の権力を用いて部下に調べさせ、次の段階に行こうとしていたかです。ですが、サムエル記が何も語っていませんので、それ以上詮索することはできません。サムエル記が語っているのは、ダビデが行動を一步進めたことです。4節です。〈11:4〉 ダビデは主なる神の御意思を知つていました。ウリヤの妻と床を共にすることとは「姦淫してはならない」を犯すことであり、「あなたは隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻を欲しがってはならない」を犯すことを知つていました。なのに、御心を損なつてしまいました。ここに、罪の恐ろしさがあります。

結果、バテ・シエバは身ごもりました。すると、ダビデは何をしたでしょうか。夫であるヘテ人ウリヤを戦場から呼び戻しました。自分の行つたことを覆い隠すためです。ウリヤが戦場から戻つて家でくつろげば、その後バテ・シエバが出産しても、みんなはウリヤとバテ・シエバの子と思うからです。ところが、ウリヤは自分の家に帰りませんでした。その理由をウリヤが語っています。11節です。〈11:11〉と。ある読み手は、ウリヤが妻の浮気を気づいていたのではないかと考えます。ダビデ王が親切すぎるからです。ですが、サムエル記は何も語っていないので、詮索するのは意味がありません。サムエル記が語っているのは、ウリヤが執つた誠実な行動が、彼を死に導くことになつたことです。なぜなら、ダビデ王がウリヤを戦死させようとしたからです。ダビデ王は將軍ヨアブ宛の手紙を書き、それをウリヤに持たせて、戦場に返しました。その手紙は次のように書かれていました。15節です。〈11:15〉 こうして、ウリヤはダビデによつて殺されてしまいました。バテ・シエバは夫が戦死したことを聞いて、いたみ悲しみました。ですが27節を見ますと、バテ・シエバが悲しみ、喪に服した行為が、形式的にさえ見えます。27節前半です。〈11:27ab〉 ウリヤが死んだので、ダビデがバテ・シエバを妻として迎え入れても

姦淫の罪を犯すことにはなりません。したがつて、表面上はすべて問題なく事が運んだように見えました。ですが、主はそのことを問題になさいました。27節3文目です。〈11:27c〉

### 三、何を学ぶか

きょうの、ダビデが主の御心を損なつてしまつた物語より、私共は何を学ぶことができるでしょうか。

第一は「罪はエスカレートする」ことです。私共には思いもよらないところから誘惑がやつてまいります。罪は戸口で待ち伏せて、私共を恋い慕つてきます。ですが、それを治める責任があります。そうしないと、罪はエスカレートして、あつという間に大きな問題に発展します。

第二は「言い訳をしない」ことです。罪を犯してしまつたら、すなわち主なる神の御心を損なつてしまつたら、言い訳をしないで認めることです。これによつて、罪がエスカレートするのを防ぐことができます。

第三は「キリストの贖い」の大きさです。キリスト教会は、聖書の中心がイエス・キリストによる罪人の救いであると受け止めています。そのメッセージを神の言葉として信じています。したがつて、ダビデが犯した罪は、すなわち主なる神の御心を損なつた失敗は、イエス・キリストにおいて赦されました。